拊掌談

芥川龍之介

名士と家

夏目先生の家が売られると云ふ。ああ云ふ大きな家は保存するのに困る。

書斎は二間だけよりないのだから、あの家と切り離して保存する事も出来ない事はないが、兎に角相当な人程小さい家に住むとか、或は離れの様な所に住んでゐる方が、あとで保存する場合など始末がよい。

帽子を追つかける

道を歩いてゐる時、ふいに風が吹いて帽子(ばうし)が飛ぶ。自分の周囲の凡(すべ)てに対して意識的になつて帽子を追つかける。だから中々帽子は手に這入(はい)らない。

他の一人(ひとり)は帽子が飛ぶと同時に飛んだ帽子の事だけ考へて、夢中になつてその後(あと)を追ふ。自転車にぶつかる。自動車に轢(ひ)かれかかる。荷馬車(にばしや)の土方(どかた)に怒鳴(どな)られる——その間(あひだ)に帽子は風の方向に走つてゆく。かう言ふ人は割合に帽子を手に入れる。

しかしどちらにしろ人生は結局さううまく行(ゆ)くものではないらしい。余程(よほど)の政治的或は実業的天才でもなければ、楽々と帽子を手に入れる様な人は恐らく居(ゐ)な

いだらう。

不思議一つ

安月給取りの妻君、裏長屋（うらながや）のおかみさんが、此の世にありもしない様な、通俗小説の伯爵夫人の生活に胸ををどらし、随喜（ずゐき）して読んでゐるのを見ると、悲惨な気がする。をかしくもある。

「キイン」と「嘆きのピエロ」

最近輸入された有名な映画だと云ふ「キイン」と「嘆(なげ)きのピエロ」の筋を聞いた。

筋としてはキインの方が小説らしくもあり、面白いとも思ふ。大抵(たいてい)の男はキインの様な位置には割になれ易いものである。大抵の女は、キインの相手の伯爵夫人の様な境遇には置かれ易いものである。

嘆きのピエロ夫妻の様な位置には、大抵の人達は、一生に一度もなり憎(にく)い事である。まして虎に咬(か)みつかれる様な事は、自分自分の一生を考へてみた所、一寸(ちよつと)ありさうもないではないか。これが若し虎ぢやなしに、犬だつたら兎(と)に角(かく)。

映画

映画を横から見ると、実にみじめな気がする。どんな美人でもペチヤンコにしか見えないのだから。

又

映画はいくら見ても直ぐにその筋を忘れて仕舞(しま)ふ。おしまひには題も何もかも忘れる。見なかつた前と一寸(ちよつと)も変りがない。本ならどんなつまらないと思つて

読んだものでも、そんなにも忘れる事はないのに、実に不思議な気がする。

映画に出て来る人間が物を云つて呉(く)れたら、こんなに忘れる事はあるまいとも考へて見る。自分がお饒舌(しやべり)だからでもあるまいが。

犬

日露戦争に戦場で負傷して、衛生隊に収容されないで一晩倒れてゐたものは満洲犬にちんぼこから食はれたさうだ。その次に腹を食はれる。これは話を聞いた

だけでもやり切れない。

「辨妄和解」から

安井息軒の「辨妄和解」は面白い本だと思ふ。これを見てゐると、日本人は非常にリアリスチツクな種族だと云ふ事を感じる。一般の種々な物事を見てゐても、日本では革命なんかも、存外雑作なく行はれて、外国で見る様な流血革命の惨を見ずに済む様な気がする。

刑

死刑の時絞首台迄一人で歩いてゆける人は、殆ど稀ださうだ。大抵は抱へられる様に台に登る。米国では幾州か既に死刑の全廃が行はれてゐる。日本でも遠からず死刑と云ふ事はなくなるだらう。

無暗と人を殺したがる人に、一緒に生活されるのは、迷惑な話ではある。だがその人自身にとつて見れば、一生を監禁される――それだけで、もう充分なのだから、強ひて死刑なぞにする必要はない筈である。

又

囚人(しうじん)にとつては、外出の自由を縛(しば)られてゐるだけで、十二分の苦しみである。在監中、その人の仕事迄取りあげなくともよささうなものである。

仮に僕が何かの事で監獄(かんごく)にはいる様な事があつたら、その時にはペンと紙と本は与へて貰ひたいものだ。僕が縄(なは)をなつてみたところではじまらない話ではないか。

又

学校にゐた頃の事、授業が終つて二階から降りて来た。外にはいつの間(ま)にか、雨がざあざあ降つてゐた。僕は自分の下駄(げた)を履(は)く為に下駄の置き場所へ行つたのである。そこにはあるべき下駄がなかつた。いくら捜(さが)してもない。僕は上草履(うはざうり)をはいてゐた。外には雨がひどく降つてゐる。

全く弱つて仕舞(しま)つた。併(しか)しそこには僕のでない汚(きたな)い下駄は一足あつたのである。それを欲しいと思つた。とりたいと思つた。

結局その時はその下駄をとらなかつたが、あの場合あの下駄をとつたとしても、それは仕方のない事だと

思ふ。

（大正十五年二月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。